

遠い国から

飯 島 孝

〈イタリア国立パドバ天文台アジア観測所 Osservatorio Astrofisico, I-36012 Asiago (Vi) ITALY〉

e-mail: iijima@astras.pd.astro.it

1543年といえば日本では鉄砲伝来の年ということになっていますが、ヨーロッパの人にとっては「日本発見」の年です。「日本はコロンブスのアメリカ大陸発見より51年後になってやっと発見された。」と言われると、日本人は「そんなバカなことがあるか、われわれは昔からずっとここに住んでいた。」と思うでしょうが、ヨーロッパの人にとっては日本は地球上に残された最後の秘境の一つだったのです。日本とヨーロッパ、どちらにも長い歴史があり、現在は似たような社会を作り上げていますが、やはりどこか違う。ヨーロッパで仕事をしていて感じたことを私なりにまとめてみました。

日本からヨーロッパまで飛行機ならわずか10時間、私が住んでいるイタリアにも毎年たくさんの日本人がやってきます。イタリアのテレビでも「以前は日本人観光客はローマ、ナポリ、フィレンツェなどの有名な観光地を見て回るだけだったけれど、最近はイタリア人もよく知らないような田舎の観光の穴場みたいのところまでどんどんやってくる。このままではイタリアは日本人にのっけられてしまうのではないか。」などと言っています。しかし私は「それでは日本人はいったい何を正在しているのだろうか、イタリアやヨーロッパの文化をどれほど理解しているのだろうか。」と考えるとどうしても懐疑的にならざるをえません。例えば服装に関して、和服には日本ではどんな人がどんな場合にどんな物を身に着けるかというはっきりした基準があります。結婚した人は振袖を着てはいけなし、おばあさんが花柄の着物を着ていたら「かわいそうに、とうとうボケちゃって。」と言うこととなります。ヨーロッパにも洋服について同じような基準があります。しかし明治以来もう100年以上にわたって洋服を着ているのに日本にはまだ洋服についてそのような基準ができていないようです。日本でも若い人向けの物は派手

だけれど意外に安く、年配の人が身に着けるの方が地味でも値段は高いです。それはヨーロッパでも同じで、日本から若い女性がたくさんやってきて、円高のおかげもあって、超高級ブランドの最高級品を買いまくっていますが、そのような高価な品物は実はほとんどが年配の人向けのものなのです。だからそんな物を身に着けていると「日本の若い人は何てセンスが悪いのだろう、自分でハンドバッグが買えなくておばあさんのお古を使っているのだろうか。」と思われてしまいます。私は日本からきた人に「せっかくイタリアにきたのだから高級品を買いにいっ前に自分と同世代の人がどんな服装をしているかをよく見てください。」というのですが、なかなか聞いてもらえないのです。

ところで、私が天文学の研究のためにイタリアに来てもう25年になりますが、パドバ天文台に来て最初に感じたのは天文台の中の空気がどこか違うということでした。日本と同じような装置を使い、同じような仕事をしているのですが、そこで研究している人たちの周りに漂っている空気が日本とはどこか違うのです。半年ほどして、イタリアでの生活にも慣れてきた頃になってようやく



何が違うのか、その原因がおぼろげながらわかってきました。日本と違って、ヨーロッパの人たちにとっては天文学や物理学はオペラやクラシック音楽と同じような伝統文化の一つらしいのです。

日本では明治維新と同時に物理、化学、数学、天文学などのヨーロッパの近代科学が入ってきたので、それらは近代の合理精神から生まれたものだと考えがちですが、ヨーロッパの人にとっては中世の魔術だか科学だかわからないようなものの中から生まれ、育ってきた文化なのです。伝統文化ということでは日本の茶の湯や生け花と似たようなものかもしれません。私は茶の湯や生け花については門外漢だから詳しいことは知りませんが、千利休がいて、古田織部がいて、小堀遠州がいて茶の湯という文化が育ってきたように、ヨーロッパではコペルニクスがいて、ガリレオがいて、ニュートンがいて天文学や物理学、数学といったものが育ってきたのです。だから日本人が天文学や物理学の研究をしているのをヨーロッパ人が見ると、外国人が茶の湯をしているのと同じように見えるようです。

茶の湯の例えを続けるなら、日本にはたくさんの流派があり、それぞれの流儀があります。どのやり方が正しくて、どれが間違っているということはありません。日本人ならそのようなことは誰でも知っていますが、外国からきて茶の湯を勉強したいという人はどうでしょう。ある家に行ったら「このようにしなさい。」と言われ、別の家に行ったら別のやり方を教えられ、次の家に行ったらまた違うやり方をしろと言われたら、どうしても「どれが正しいのだろうか。」と考えてしまうでしょう。日本人が天文学などを研究する場合にも同じようなことがあるようです。ヨーロッパにも巨額の予算とたくさんの人を使って研究を行っているグループもあれば、一人あるいは少人数でコツコツ研究をしている人もいます。しかし、どちらも「むこうはむこう」といった感じで、それぞれが自分の研究スタイルを守って、自分にとって

興味のある研究をしています。日本ではそんなわけにいかず、いつも外国の情勢やまわりの人のことを気にして、巨大プロジェクトに参加している人は鼻たかだか、肩で風を切って歩いているし、その一方でそれに参加できなかった人は「主流派からはずれた。」といった感じで、何となく卑屈になってしまいます。そのあたりが日本とヨーロッパの研究者の違いかもしれません。

うっかりすると「伝統のないところの方が過去にとらわれずに新しいことができるだろう。」と考えてしまいそうですが、実際はそうではありません。生け花でたとえるなら、池坊の宗匠が花以外のオブジェを飾って「これが新しい時代の生け花だ。」といえ「わー、たいへんなことになった、これが理解できない人間は時代遅れなのか。」ということになります。しかし、外国からきて生け花を勉強している人が同じことをしたら「そんなものは生け花じゃありません、バカなことをやっていないでもっとまじめに勉強しなさい。」と言われるだけで、生け花の新しい流れにはなれないのです。

天文学の分野で言うと、電波望遠鏡を使って宇宙からやってくる電波を調べる電波天文学や人工衛星を使って大気圏外に出て、天体の出す X 線を測定する X 線天文学では日本は世界の最先端をいっています。しかし、まだ宇宙から電波がきているなんて誰も考えていなかった時代に、電波の器材を軍隊から払い下げてもらって宇宙に向けてみたのはジャンスキーというイギリス人でした。それが電波天文学のそもそもの出発点になりました。それから X 線は大気で吸収されてしまうから宇宙から強い X 線がやってきても地上には届きません。人類やその他の生物が地球上で安心して生きていられるのはそのためですが、その一方で、宇宙の天体がどんな X 線を出しているかを調べたくても地上からではどうにもなりません。しかし、1960年代になってロケットや人工衛星を使って大気圏外に出ることが可能になりました。

た。そのときにアメリカで研究をしていたロッシというイタリア人の先生が世界中の研究者に「ロケットにX線測定器を搭載して宇宙からくるX線を測定できるようになった、ついでにはどんな天体がどのくらいのX線を出しているかを考えていただきたい。」と呼びかけました。それに対して世界中の研究者の答えはすべて「ロケットに搭載できるような小さな測定器で受信できるほど強いX線を出す天体は宇宙には存在しない、そんな実験はやるだけ無駄だ。」というものでした。日本だったら話はそこで終わってしまいます。国の予算が獲得できないというような問題ではなく、外国で誰もやっていなくて、しかも満足な成果が得られそうにない研究計画では大学の教授会を通りません。しかし、ロッシ先生は「とにかくやってみようではないか、宇宙には人間の考えが及ばないような現象が存在するかもしれない。」と行って実験を行いました。そして実際に、全く予想もしなかった強力なX線を出している天体が次々に見つかって、新しい天文学の幕開けになったのです。

それらの新しい天文学の分野では日本の研究者も重要な仕事をたくさんしているのですが、日本でそのような新しい研究分野が生まれるということは残念ながらなかったのです。それは決して「日本人に独創性がない。」というような問題ではなく、天文学やその他の自然科学が日本の伝統文

化ではないからだと思います。外国人でも日本にきてしっかり勉強すれば茶の湯の免状ぐらい取れるでしょう。しかし、本当の意味で新しい研究を始めるというのは、いわば茶の湯や生け花の新しい流派を立てることに相当します。それが今のところ日本人でなければできないように、自然科学の分野では日本の研究者が新しい研究の流れを作り出すということではできないようです。「日本はもうヨーロッパやアメリカに追いついた。」とか「ある分野ではもうヨーロッパを追い越した。」とかいう話を時々耳にしますが、ヨーロッパと日本の間には何か文化のレベルの質的な違いがあるように思われます。

それでは日本は永久にヨーロッパに追いつけないかということ、必ずしもそうではないと思います。鎌倉時代のはじめに中国から喫茶の習慣が伝わり、それから400年ほどして茶の湯の文化が生まれました。また、最澄が天台宗を伝え、それが鎌倉仏教として日本に定着するまでにやはり400年ほどかかっています。これから何世紀かすれば自然科学も日本に定着して、独創的な研究が行われるようになり、日本人がヨーロッパの研究者を指導するようなことになるかもしれません。しかし、現在はその段階にはほど遠く、そういった意味でヨーロッパはまだまだ遠い国だと思えるのです。